

在校生に伝えたい卒業生の思い その2 「ぼく、私の残したい桃小のよい伝統だなと思うこと」

桃小の见えない伝統は、読書だ
と思います。

図書委員会の目標が、110冊本
を読むことだと聞きました。そん
なに本を読む目標を立てられる
のも、桃見っ子だからだと思います。

桃小の図書室には、たくさんの
先輩たちが読んできた古い本が、
いっぱいあります。その本の1ペ
ージを開くのが、とてもよかったです。
これからもたくさん読んで
ほしいです。



ぼくの残したい、また、桃小のよい伝統だなと思うこ
とは、本をたくさん読むことです。理由は、まず、本を
読むと新しい言葉を知り、学習につながることもあるか
らです。本をたくさん読める桃小は、幸せだと覚えてお
いてほしいです。

この伝統を残すために、ぼくは、図書室で下学年に会
う時はラッキーだと思います。下学年の前で、6年生が
本を借りていれば、「6年生も本を借りているんだな」
と思ってくれるからです。

桃小の见えない伝統は、「目標に向かってがんばる心」だ
と思います。

そう思った理由は、本とあいさつです。

昨年度は、平均で、「一人百冊の本を読もう」という目標を、
見事達成しました。そして、あいさつでは、日本一のあい
さつを目標にがんばっています。最近、あいさつの声が大
きくなり、進んで、相手を見てできるようになってきたと
思います。目に見えない伝統だからこそ、大切に守って
いってほしいと思います。

私が桃小に残したい伝統は、学年問わず、仲よくすることです。私が、1・2年生で、桃小に入って緊張していた時、高学年の人たちが、「遊ぼう！」と言って、一緒に遊んでくれました。その後、私は、6年生の人と友だちになって、「6年生は、やさしいな。」と思ったからです。



僕が思う桃小の見えない伝統は、上学年は、下学年に優しく接し、一人一人学年が違って、同じでも、仲がよいということです。僕が1年生の時、当時の6年生が、優しく手を握り、笑顔で一緒に歩いてくれたことを覚えているからです。だから、下学年に優しく接する、学年関係なく仲が良いという伝統、また、あいさつの伝統も、卒業の日まで、6年生がこの伝統を日常でも表して、下学年に理解してもらえるようにしたいです。

私が残したいものは、他の人への気づきや協力することです。協力は、何か一つやる時に、協力してやること。気づきは、困っている人がいたら、助けてあげたりすることです。自分のことばかりではなく、他の人を気づかうことを残していきたいです。

私が思う見えない伝統は、強い心や優しい心だと思います。例えば、合奏部では、なかなか上手にひけなくても、みんなが一人のためにフォローし合って、みんなで上手にひけるようになりました。もう一つは、みんないやなことがあっても、弱音をはいたりせずに、すべて乗り越えていけたので、よかったと思います。

私が残したいことは、まちがっていることは、ちゃんと教えてあげることです。1・2年生がまちがっていることを注意することはできるけど、友だちがまちがっているのを注意するのは、とても勇気がいります。桃見っ子は、それができると思います。それに、いわれた方も、「あっ、そうか。」と素直に言っているところも、とてもいいなと思います。

